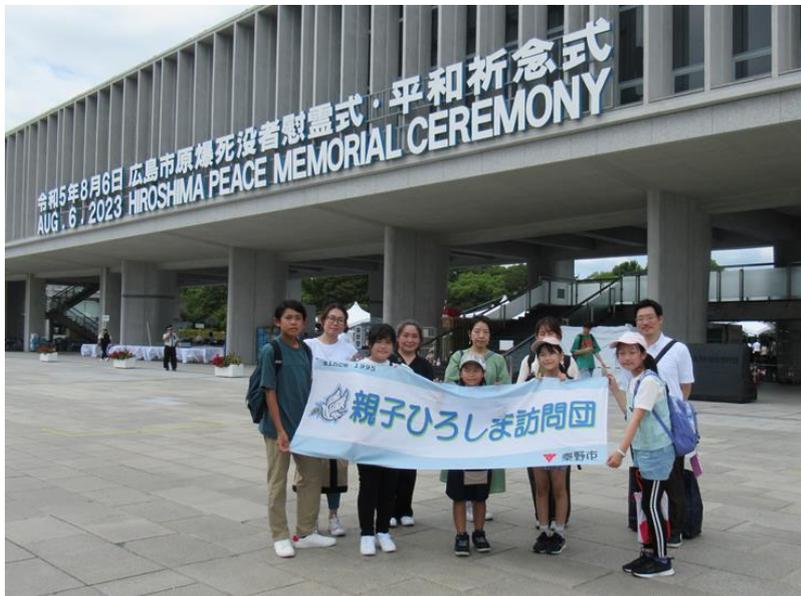


親子ひろしま訪問団



令和5年度訪問の記録

令和5年（2023年）8月5日～7日



秦 野 市

～ 目 次 ～

は し が き	・・・・・・・・・・・・・・・・	P1
I 親子ひろしま訪問団		
1 訪問団の主なスケジュール	・・・・・・・・・・・・・・・・	P2
2 団員名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・	P2
3 訪問の概要	・・・・・・・・・・・・・・・・	P3
4 訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・・・・・・・	P15
5 訪問団規約	・・・・・・・・・・・・・・・・	P24
II はだの平和の日のつどい	・・・・・・・・・・・・・・・・	P25
III 被爆アオギリ二世の植樹	・・・・・・・・・・・・・・・・	P25
IV 資 料		
1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文	・・・・・・・・・・・・・・・・	P26
2 広島市平和宣言	・・・・・・・・・・・・・・・・	P27
3 (広島)こども代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・・・・・・・	P29

は し が き

戦後50年を契機けいきに始まった「親子ひろしま訪問団」は、今年で27回目を迎え、258名の親子が広島を訪問しました。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。昨年2月に起きたロシアによるウクライナへの軍事侵攻ぐんじしんこうなど戦争、内戦、紛争がたびたび報道ほうどうされている昨今、訪問団員10名にとって、平和記念資料館しりょうの見学、平和記念式典への参列、被爆体験談ひばくの聴講ちようこうなどの経験けいけんは、人間が起こす戦争の最悪の結果を知り、平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

また、訪問終了後には、訪問団が被爆地ひばくちヒロシマで感じ、学んできたことを広く市民へ継承けいしょうしていくため、8月19日に「はだの平和の日のつどい」を開催かいさいし、活動報告ほうこうを行いました。訪問団員の生の声が、会場の多くの人々の心に届いたと思います。

本市では、核兵器廃絶かくへいきはいぜつ、非核三原則ひかくさんげんそくの堅持けんじ、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」こうきゅうへいわを定め、また、広島及び長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」せんげんや「平和首長会議」およに加盟なごさきし、平和への思いを発信しています。

平成20年6月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊とうとさを考える機会として、8月15日を「平和の日」と制定しました。毎年「平和の日」に近い日程で、市民を主体とした様々な平和事業を展開しています。

また、平成21年8月には、市内事業所の協力を得て、市役所に「平和の灯モニュメント」ともしびを、自治体としては全国で14か所目、神奈川県内では初めて設置せっちしました。このモニュメントの種火たねびは、同年の「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火さいかし持ち帰った炎ほのおを、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年、訪問団が広島市に届けた千羽鶴とどはおおよそ6万5千羽にもなりました。一羽一羽、平和を願いながら、丁寧ていねいに折っていただいた多くの市民の皆みなさま様に、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴せんぼづるの重さに、鶴つるを折られた皆みなさま様の思いを感じながら、心を込めて鶴つるを捧ささげました。

平和記念式典への参列や被爆体験談ひばくの聴講ちようこうなどの貴重な経験きちようを含め、被爆地広島で見聞きし学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継いでくれることを心から願います。

I 親子ひろしま訪問団

1 訪問団の主なスケジュール

日 時	項 目	内 容
7月19日(水) ① 午後2時30分 ～3時30分 ② 午後3時30分 ～4時	① 説明会	訪問日程等の説明、「はだの平和の日のつどい」での報告方法検討
	② 結団式 市長表敬	市長メッセージ・千羽鶴の受渡し 場所：秦野市役所本庁舎4階 議会第1会議室
8月5日(土) ～ 8月7日(月)	広島訪問	① 原爆の子の像へ千羽鶴を拝納 ② 広島平和記念資料館見学 ③ 平和記念式典参列 ④ 被爆アオギリ二世の苗木の受取 ⑤ 被爆体験聴講 ⑥ 平和記念公園内碑めぐり ⑦ とうろう流し ⑧ 宮島見学
8月19日(土) 午後5時15分 ～5時50分	はだの平和の日のつどい	訪問の活動報告 場所：クアーズテック秦野カルチャーホール（文化会館）ホワイエ

2 団員名簿

保護者 氏名	子ども 氏名	役 割
いわもと きよ 岩本 貴世	いわもと けいた 岩本 圭汰 西中3年	団 長
ささはら さいこ 笹原 沙衣子	ささはら あかり 笹原 朱里 鶴巻小6年	副団長
なかむら さとこ 中村 聡子	なかむら あまね 中村 天音 西小5年	記 録
こばやし ひろのり 小林 弘典	こばやし あやか 小林 彩夏 南小5年	会 計
ながさわ ともこ 長澤 智子	ながさわ いずみ 長澤 和泉 南中2年	監 事

3 訪問の概要

(1) 訪問1日目・8月5日(土)

8:07 小田原駅出発

11:38 広島駅着

14:00 広島平和記念公園見学

千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げる

15:00 広島平和記念資料館見学



原爆の子の像

この像のモデル佐々木禎子氏は、2歳の時に爆心地から

1. 7キロメートルの自宅で被爆しました。足が速く、とても元気な子でしたが、小学6年生の時に原爆症を発症しました。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けましたが、中学校に入学できずに亡くなりました。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられました。

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、この子どもたちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘を寄贈しました。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴式に音が出るようになっています。この鐘と金色の折り鶴は平成15年に複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されています。

訪問団は、広島到着後、市民から託された千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げました。平和記念公園には世界中から大勢の人々が集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が捧げられていました。



平和な未来へ夢を託す少女の像



市民から寄せられた千羽鶴の拝納

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街でした。しかし、爆心地に近かったため、原爆投下により壊滅しました。

その後、昭和29年（1954年）に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わりました。

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されています。

毎年、原爆が投下された8月6日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が開催され、夜には元安川をはじめ市内六つの川で犠牲者を慰霊する「とろろ流し」が行われています。

平成28年5月には、バラク・オバマ元大統領がアメリカ合衆国大統領として初めて訪れ、原爆死没者慰霊碑の前で、核兵器なき世界の実現へ向けた思いをスピーチしました。

今年5月にはG7広島サミットが開催され、G7首脳が原爆死没者慰霊碑への献花や公園内で被爆桜（ソメイヨシノ）の植樹を行いました。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するために昭和30年（1955年）に開設されました。本資料館は、「導入展示」、「核兵器の危険性」、「広島のみち」の3つのゾーンに分けて展示している東館と被爆の実相を「8月6日の惨状」と「被爆者」の2つのゾーンに分けて展示している本館の二つの建物からなります。

本館で目を引いたのは原爆投下前後の広島市内の様子をプロジェクションマッピングで見ることのできる展示で、原爆が落とされて、一瞬で美しい広島街が焼け野原になってしまった様子を見ることができます。亡くなった人が約14万人もいたことを知り、それだけ多くの人々が亡くなられた上、被爆されて



平和資料館を見学する団員

今も苦労されている方々も多くいらっしゃることを知りました。そのほか、8月6日の原爆投下以後の惨状の展示がされており、原爆で負傷した痛々しい姿の少女や人影が残る石など、被爆の実相を伝える展示が続きます。

(2) 訪問2日目・8月6日(日)

- 8:00 原爆死没者慰霊式並びに
平和祈念式参列
- 9:15 被爆アオギリ二世の苗木の受取
- 10:00 被爆者体験談の聴講
- 14:30 平和記念公園内の碑めぐり
- 20:30 とうろう流し



それぞれの平和への思いを灯籠に込めた

原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年8月6日に、被爆者、政府、自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われています。

午前8時に開会し、松井一實広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めました。



平和宣言を行う松井広島市長



この1年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は

5,320名。名簿搭載者の総数は33万9,227名に、名簿の数は125冊となりました。

原爆が投下された午前8時15分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにしまし

平和記念式典に参列する団員たち。訪問団は、初めて参列する式典の、テレビを通して見る様子とは異なる厳粛な雰囲気緊張しながら、参列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げました。

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信されました。

松井市長は平和宣言で、78年前の当時8歳の被爆者の訴えやG7広島サミットに触れ、各国に「世界中に「平和文化」を根付かせる取組を広めていきましょう。」と呼びかけるとともに、「広島を訪れ、平和への思いを発信していただきたい。その上で、市民社会が求める理想の実現に向け、核による威嚇を直ちに停

止し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けて一步を踏み出すことを強く求めます。」と訴えました。

訪問団は、初めて参列する式典の、テレビを通して見る様子とは異なる厳粛な雰囲気^{ふんいき きんちよう}に緊張しながら、参列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げました。

子どもたちは、出席者の挨拶や同年代であることも代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いと、この貴重な経験を心に刻みました。

原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の家形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室には原爆死没者名簿が納められています。碑の正面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」という言葉が刻み込まれています。この碑文には主語がありません。人類の誓いであるからです。



原爆死没者慰霊碑

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打ちます。原爆が投下された事実、また核兵器のない世界を実現する為に、みんなで語り継ぎ平和を訴え続けていきたいと思いました。

平和の灯

昭和39年(1964年)8月1日建立。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏的设计により、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉などの全国の工場地帯から届けられた「産業の火」が、昭和20年(1945年)8月6日生まれの7名の女性により点火されました。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴です。

本市では、平成21年8月6日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置しました。同年の親子ひろしま訪問団がこの「平和の

灯」から採火し持ち帰った火が、燃え続けています。

被爆したアオギリ

爆心地から約1.5キロメートル離れた東白島町にあった当時の広島通信局の中庭に、3本のアオギリの木が植えられていました。

原爆の投下によって、熱線と爆風をまともに受けた3本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、爆心地側の幹の半分が焼け焦げました。

しかし、枯れ木同然だったアオギリは翌年の春、奇跡的に新芽を出し、その姿は、原爆投下と敗戦によって疲弊した人々の心に、生きる勇気と希望を与えました。

昭和48年(1973年)、当時の中国郵政局(かつての通信局)の建替えに伴い、平和記念公園内の現在の場所に移植されました。3本のうち1本は枯れてしまいましたが、この被爆したアオギリの種子は国内外に贈られ、「被爆アオギリ2世」として大切に育てられています。

今年度は親子ひろしま訪問団団員が通学する学校にこの「被爆アオギリ二世」を植樹するため、平和祈念式典終了後、広島市緑政課職員から苗木を受け取りました。



代表して被爆アオギリ二世の前で
苗木を受け取る団長

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七氏から被爆体験のお話を伺いました。増岡氏は、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけました。

【被爆体験談(増岡清七氏のお話から抜粋)】

昭和20年(1945年)8月6日は、建物疎開作業のため、約8,300名の中学生が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場

等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡氏を含む3年生の半数の70名は、爆心地から約1キロメートルの場所で、引率の先生の話聞いていた。

午前8時15分、突然、強い光が目に入り、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見渡すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だか分からないほどの形相だった。熱で剥がれた皮膚は、爪のところで止まり、とぐろを巻くように垂れ下がっていた。

増岡氏も左顔面や腕など皮膚が垂れ下がり、今もその痕が残る。何が起こったのか、どこが安全なのかも分からないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じる事。広島市の市街が炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた防空壕には、人が重なり合い、あふれていた。

ひん死の状態、水や家族を求めていた。木陰でそのまま眠ってしまったところを翌日、救助隊の馬車で市外の民家の座敷に運ばれた。既に多くの人丸太のように横たわっていた。この時、初めて汚い布で患部を拭いたが、治療はされなかった。

翌日、汚い茶碗によそわれたお粥が1杯置かれたが、皮膚のうみで左目と口

増岡清七氏（広島市在住）



爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。



被爆体験談聴講

が開かず、食べるのに困った。皮膚が垂れ下がった左顔面や腕に太陽の光が当たると、針でチクチク刺されるような痛みが続いた。数日後、行方を必死で探してくれた父親と再会し、荷車に乗せられ親戚宅に行った。

その時は、増岡氏の体を気遣って教えられなかったが、自宅は全壊、母親は即死していたと、後に父親から伝えられた。療養のための旅行で留守にして死を免れた父親も翌年、増岡氏が15歳のときに亡くなった。恐らく、増岡氏の行方を探するために原爆投下直後の広島を歩いて回る中で、残留放射能を浴びてしまったためと思われる（入市被爆）。火葬する設備がなく、自分自身でだびに付した。既に兄は特攻隊員として沖縄で戦死しており、家族は姉と二人きりになってしまった。

学友たちも多くが原爆により亡くなったが、そのうちの一人の遺品が、平和記念資料館に展示されている。

原爆ドーム

後に「原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、大正4年（1915年）に広島県の物産品の販売促進を図る拠点として建設され、建設当時は「広島県物産陳列館」という名称でした。その後、「広島県産業奨励館」と改称されましたが、県内の物産品の展示・販売を行うほか、博物館、美術館としての役割も担っていました。

しかし、戦争が激しくなった昭和19年（1944年）3月、産業奨励館としての業務が廃止され、内務省中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本材木広島支社など統制会社の事務所として使用されていました。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施されていました。全体は3階建てで、正面中央部分に5階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームが載っていました。

爆心地から約200メートルの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼しました。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいた全ての人々は即死しています。

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、平成8年(1996年)に世界遺産へ登録されました。

静かにたたずむ原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけなと改めて強く感じさせられました。



平和そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園及びその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑など50を超える原爆関連の記念碑や記念建造物があります。訪問団員は猛暑の中、それらのいくつかをじっくり見学し、戦争や原爆の恐ろしさを実感しました。



ガイドの説明に聞き入る団員たち

被爆した墓石(慈仙寺跡の墓石)

当時、太田川が元安川と本川に分かれるあたりは「慈仙寺の鼻」と呼ばれていましたが、それはここに慈仙寺という浄土宗の大きなお寺があったからです。その慈仙寺は爆心地から約200mで、全ての建物は壊滅、住職ほか2名は清掃中に即死、浴室で洗濯中の住職の妻も重傷で翌日死亡し、結局全員が亡くなりました。

また、当時慈仙寺は中島国民学校の分校場として利用され、通学していた十数人の低学年の児童も犠牲になりました。平和記念公園の中で、被爆当時の地面をそのままとどめているのは、この墓地だけです。公園が盛り土し



被爆した墓石

て建設されたため、周囲を石で囲んで、池の底のようになってしまったこの部分が当時の地面です。

(参考：『碑めぐり解説のしおり』被爆体験証言者交流の集い 編 広島平和記念資料館啓発課)

げんばくくようとう 原爆供養塔

ばくしんち
爆心地に近いこの付近には、ひばく
被爆後、いたい
遺体がさんらん
散乱し、また、川から引き上げられたものなど、いたい
無数の遺体が運ばれ、だびに付されました。

昭和21年(1946年)、市民からの寄附により、かりくようとう
仮供養塔、かりのうこつどう
仮納骨堂、れい
礼拝堂が建立され、その後、昭和30年(1955年)に、広島市が中心となり、ろうきゆうか
老朽化したのうこつどう
納骨堂を改築し、各所にさんざい
散在していた引き取り手のないいこつ
遺骨もここに集め納めました。身内の見つからないいこつ
遺骨や氏名の判明しないいこつ
遺骨約7万柱が納められています。

毎年8月6日には、様々なしゅうきよう
宗教及しゅうは
び宗派合同のくよういれいさい
供養慰霊祭が営まれています。



原爆供養塔

かんこくじんげんばくぎせいしゃいれいひ 韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約300万人のちょうせんじん
朝鮮人がおり、数万人が広島市内でひばく
被爆したといわれています。

「死者のれい
霊はかめ
亀のせ
背に乗ってしょうてん
昇天する」という故事にならって、かめ
亀をかた
形取っただいざ
台座の上にひちゆう
碑柱が建ち、その上に二つのりゅう
竜をきざ
刻んだかんむり
冠が載せられています。

碑は、当初、軍人であった朝鮮王家の一族李殿下が司令部への出勤途中に原爆投下に遭い、その後発見された場所付近ということから、本川橋西詰めに建立されました。

その後、各方面からの強い要望により、平成11年（1999年）7月に平和記念公園内に移設されました。慰霊碑の石は、国に帰れなかった人々への思いから、ふるさと韓国の石が使われています。

今年5月には韓国の尹錫悦大統領が岸田総理とともに慰霊碑に献花を行いました。



韓国人原爆犠牲者慰霊碑

動員学徒慰霊塔

第二次世界大戦中、労働力の不足を補うため、勤労奉仕に動員され戦禍にたおれた学徒と、原爆の犠牲者を含めた約1万人の学徒の霊を慰めるため建立されました。

平和の女神像と8羽のハトを配した高さ12mの有田焼の陶板仕上げで、末広りの5層の塔の中心柱に慰霊の灯明がついている。塔の左右にある4枚のレリーフは「食糧増産作業」「女子生徒の縫製作業」「工場内での鉄工作业」「広島灯ろう流し」を表し、その裏に全国戦没学徒出身校351校の校名と動員学徒悼歌“ほのお果てては”が記されています。

（参考：『碑めぐり解説のしおり』被爆体験証言者交流の集い 編 広島平和記念資料館啓発課）



動員学徒慰霊塔

平和の鐘

核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとして建立されました。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっています。

かね ぼんしょう じゅうようむけいぶんかざい
鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財
ほじしゃ にんげんこくほう かとりまさひこ
保持者（人間国宝）である香取正彦氏が
制作し、表面には「世界は一つ」を
しょうちょう しょう ぼ
象徴する国境の無い世界地図が浮き彫
りにされています。

つきざ げんすいぼく こ
撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原
子力のマークがデザインされており、
しょうろう おおが
鐘楼の周囲の池には大賀ハスが植えら
れています。

ひばく きず おお いた いた ひばくしゃ れい ながさ
被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、やけどの痛みをしのいだという被爆者の霊を慰
めたものです。



平和への思いを込め、鐘を突く団員たち

とうろう流し

げんぱく いっしゆん うば
原爆は一瞬にして多くの命を奪いました。そし
て、即死を免れてもひどいやけどを負った人たちが
そくし まぬか
大勢いました。その人たちの多くは、その熱さと痛み
いた
に耐えかねて近くの川に次々に身を投げ、川面には
たい た
遺体が浮き、川底にも遺体が沈んでいたといひます。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中心部にバ
ラック建ての商店が建ち始めた昭和23～4年頃、親
げんぱく いぞく ついぜん
族や知人を原爆で失った遺族や市民たちが追善と
くよう とうろう
供養のため、手作りの灯籠を川に流したのが、「と
うろう流し」の始まりとされています。

とうろう な か こ いっぽんき
灯籠には、亡くなった方の名前と流した人の名前を書き込むのが一般的ですが、
最近「平和への思い」が書かれる光景も目立ちます。長い歴史を持つ「とうろう流
いれい
し」は、慰霊とピースメッセージの両方の意味を持つようになりました。毎年8月6
ゆうこく もとやすばし
日の夕刻に元安橋の上流から流されています。

コロナ禍のため中止されていた自分で川に流すことが再開し、広島訪問2日目を終
しせつ
えた訪問団10名は、平和施設見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和
への思いを込めて灯籠を流しました。



元安川を彩る灯籠

(3) 訪問3日目・8月7日(月)

- 9:00 広島駅発
- 11:00 世界遺産 いつくしまじんじや 「厳島神社」見学
- 17:03 広島駅発
- 20:38 小田原駅着・解散



世界遺産・宮島「厳島神社」を見学

世界遺産「厳島神社」・日本三景「宮島」見学の様子



4 訪問団員（参加者）の声

(1) 訪問前の感想

ア 親の声

●今回2回目の参加になります。前回は長男と参加させていただき、今回は次男との参加です。気付けば次男も中学3年生。親子で参加するにはラストチャンスだったので、申し込むことにしました。次男も「戦争」について興味を持っていたので、映像などで見るよりも、実際に広島へ行って、肌で感じてほしいと思いました。

6年前、広島に降り立った時のあの暑さ。この暑さの中で原爆が投下され、訳も分からない市民はどんな思いをしたのか・・・想像を絶する思いをしたであろうと考えるだけで、胸がしめつけられたことを覚えています。「戦争」そして「原爆投下」によって多くの人の命が奪われ、日常が奪われた現実。過去のことでありますが、今も後遺症に悩んだり、心に深い傷を負っている人がいることを忘れず、今を生きる人々に語り継いでいくことが、「平和」を考える一歩につながっていくと思います。貴重な機会を無駄にせず、親子で学び、語り合い、そして語り継いでいきたいと思っています。

●秦野市で親子ひろしま訪問団という取り組みをしていることは、子供から行きたいという話をされるまで全く知りませんでした。平和祈念式典への参列は戦争の恐ろしさや平和について今一度考えることができる貴重な経験になるかと思っています。終戦から今年で78年、私も子供も戦争を知らない世代です。実際の被爆者の方の経験談を聴講することはなかなかかなうことではありません。今回の訪問で、平和と戦争について親子でじっくりと考える3日間となればと思っています。

●遠い国で起きている戦争も、どこか他人事で、かつて日本でも戦争が行われ辛く苦しい時代があったことも、子どもに教えられるような知識はなく、一緒に考えることもありませんでした。ですが、今のこの豊かな生活が当たり前ではないことや、衣服や食べ物さえも手に入らない人たちが居ることを知り、この平和な生活を続けるために自分たち出来ることを子どもと一緒に考えたいと思い参加を申し込みました。

平和記念資料館には小学生の娘にはショッキングな内容も多いかもしれませんが、戦争の悲惨さを一緒に感じ一緒に考える時間にしたいと思っています。

●近年のウクライナ戦争報道を聞くことによって、改めて戦争とは何かということを知ることとなりました。報道は一部を切り取り一方の面からしかわからないので、実際のことか当事国、当事者でないかわからないことではありますが、戦争と核という日本が背負っている過去について学ぶチャンスであると思いましたので参加を希望しました。とくに平和記念式典の参加と平和記念資料館につきましては、私たちのような戦争には無縁である世代が参加することにより良いも悪いも何を感じるかというところだと思います。

見たいことにつきましては、わからないことが多いので現地にてさまざまなことを見られるとよいと思います。

また、秦野市民による千羽鶴の作成の多さに皆様の平和への思いが強いと感じました。私の母親も作成をしたそうです。

個人的には、子供とこのような一緒に取り組むような機会がなかったので、テーマをもち取り組むということの思い出の1つとしながら子供の成長を感じつつ、行程を皆様とどのようにしていくのか準備から結果までを社会勉強していきたいとも思っています。

●この取り組みについては以前から知っていましたが、コロナ渦では行われずなくなってしまいかも・・・と残念に思っていました。しかし、また行われるということで応募をさせていただきました。昨年の参加者のなかに、親同士子供同士が共に友人関係である親子さんがいらっしや、家族だけではなく、参加後の話は友人間でも深めることができそうです。

今回は、被爆体験談に特に関心があります。説明会の日まで忘れていたのですが、小学生のころ被爆体験談を聞いたことがありました。思い出したとたん、内容や声も思い出せました。大人になって、また違った感じ方ができるのではないかと思っています。

イ 子どもの声

●参加しようと思った理由は歴史の授業で、戦争のことを習ってまずどのようなところに落とされたのかを、実際に行ってしつてみたいと思ったからです。原爆によってどのような物がこわれていたり、どんなものが展示されているのかを、見てみたいと思ったし、写真で見るより実際に見た方が、現実味がわくからです。実際に原爆の体験談を聞いてどのような状況だったのかなどのそういう話に自分は興味があるので行ってみたいと思いました。

●私は元々、広島に落とされた原子爆弾とはどのようなものだろうかと興味をもっていました。その時に学校で、親子ひろしま訪問団というチラシが配られ、この機会に行ってみたいと母に話したところ、参加してみることになりました。今回広島へ行ったら、その経験を市民の方や友達に話して戦争への思いを受け継いでいくのが私の役目だと思っています。「戦争はあってはならないこと」という思いは被爆者の方から実際に聞くことで、より深く実感できると思います。8月6日の一分間の黙とうなども、テレビでしか見たことがないので、この広島へ行くという特別な機会を活かして戦争と深く向き合えたらいいなと思っています。

●広島に行き実際に何があったのかを知りたいと思い応募しました。今まで何も知らずに過ごしていたけれど、広島に行って実物を見て学び、昔の人がどんな被害にあったのかを知りたいと思います。平和記念資料館の見学、原爆ドームの見学を通し、その時代を知り、戦争の悲惨さや平和について考えたいと思っています。

●原子爆弾や戦争はどんなものだったのか被爆体験講師の話聞いて平和についても一度よく考えてみようと思いました。

戦争や原爆などで多くの人が亡くなっているから平和な世界になってほしいです。

テレビで広島原爆特集を見て気になっていたので今回学べることはうれしいです。

●私は前から戦争に関して関心があったので、今回の行事に参加できてうれしく思っています。

一日目の広島記念資料館では調べたところかなり生々しそうに感じましたが、その中でも戦争に関しての悲しみや辛さを知ることができるように感じたので実際に見て調べただけではわからなかったことまで知れたらなと思います。

二日目の平和記念公園では前日見た写真などから感じた事と、どうか生まれ変わったら幸せな人生を過ごしてほしいということを伝えたいなと思っています。また、お好み焼きが楽しみです。

三日目のフェリーに乗るのも楽しみです。厳島神社の建物や鳥居をみたり、写真を撮るのが楽しみです。

今回の行事で様々なことを学んで、未来に引き継いでいくためにたくさん学べたらなと思います。

(2) 訪問後の感想

ア 保護者の声

●是非、いろいろな人に広島を訪れて、平和記念資料館を見たり、被爆された方の話を聞いて、あの時の惨状、その時だけのことではなく、今も苦しみが続いていることを知ってもらいたいと思いました。まずは、知ることだと思います。苦しみながら亡くなられた方の思い、生き残った方の思いを、周りの人たちに伝え、興味・関心を持つことが、平和を考える第1歩につながっていくのではないかと思います。決して過去のことではなく、核の脅威は実は身近にあることを今回、参加して改めて知ることができました。今回参加していなかったら、きっと「遠くの国で起こっている戦争」という捉えでずっといたと思います。広島を二度とくり返さないために、たくさんの人に興味関心を持ってもらえるよう、報告できればと思います。

●現地では、平和記念式典に参列し、被爆者の方の講話やガイドさんのお話を伺うなど、貴重な経験ができました。資料館では、数多くの写真やボロボロになった小さな洋服から、戦争の悲惨さを目の当たりにし、心が痛みました。中でも印象的だったのは被爆体験聴講でした。戦争中の体験や、原爆被害の実態はもとより、戦争を起こさず、平和であることを願うためには、なぜ戦争が起きたのかを追究する必要があるということを一生涯懸命に説いておられました。日本は唯一の被爆国であるが、加害の歴史もありました。被ばく経験者の方からこのような話を聞くととは思わず、はっとしました。この経験を機に、戦争の歴史をもっと知っていかなければと思いました。そして各国のリーダーが核による解決という道を選択しないよう、私たち一人一人が自分の意見をもって声をあげていくことが、平和への原点となることを確信しました。

●なぜ戦争がおきたのか？

それは私自身にもまだまだ分からないことが沢山ありますが、日本がおかした過ちを無視することは出来ないと思います。日本人が被害者であると同時に加害者だった部分を隠さずに学ぶことも重要だと感じました。

平和記念資料館で核兵器の実験についての記事を真剣に読んでいる外国人家族がいました。日本以外でも多くの危害があったこと、犠牲になった人が沢山いたことを忘れず、戦争の被害が繰り返されない世界を目指したいです。

増岡さんやピースボランティアの方との出会いの中で、自分から学ぶ姿勢を忘れず、その知識や経験を周囲の人のために役立てることの大切さを感じました。

やらされるのではなく、自分から進んで出来る人になりたいです。それを子どもや周囲の人に見せることが出来たなら、次世代への橋渡しが出来るのではないかと思います。

●この訪問で得たことは、他者に伝えたいと思いました。それは自慢とか旅行話ということではなく、秦野市が素晴らしい事業をしているということも伝える1つであります。私自身が見たこと聞いたこと体験したことを周りの方々に伝えることで平和について興味をもってもらうこと、教科書やニュースで取り上げられている内容と相違がないか考えてもらうことなど、何かを感じてもらいたいと思いました。平和や戦争、核兵器等に対してプラス意見でもマイナス意見でも良いが「無」という事はあってはいけないと思いました。実際に、職場にて「どうだったか？」と多くの方が興味に持ってもらったので写真を見せて談義をしていましたし、私と同じような年齢の子供を持っている方からはこのような体験ができることが羨ましいと言われました。何かを誰かに話すことにより、もしかすると風化させることがなく何か気づきを生み出すのかもしれない。

今回の中で印象的だったことは、

- ・体験談の話の中で、戦時中はおかしいという考えを持つことが許されなかった、それをコントロールされていた。原爆投下以前に広島が危険であるというビラがアメリカ軍によりまかれていた。

- ・碑めぐりの案内ボランティアからの広島市民の方も川での多くの死者のことを知らず川で泳いで遊んでいた、平和学習が広がってから学ぶことが多かった。(学びの必要性を感じた)

平和記念式典が世界に広がることでよりイベント的になり来賓が増えることで広島市民の方が当日に訪問ができない。(平和の祈りを世界へ発信するというプラス面が大きいとは思いますが、地元の方にとっては相反することなのかとも思いました)

- ・岸田総理のスピーチ中をメインにデモの声、その場に沿うものであるかどうかは別としてさまざまな意見があると感じた。

●一緒に参加させていただいた娘とは、お互いに感じた事を現地で話した以上に意見交換をしようと思います。家族全員でも、平和についての話をしていきたいと思っています。参加前はこんなイメージだったけれど本当はこうだった、というような話がたくさんできそうです。

今回参加をさせていただいたことで、出発前に広報などの「千羽鶴の記事」は今までとは違う感覚で読む事ができたので、この訪問に参加しとても良い体験ができた事をひろめることで、誰か何かの『ちょっとしたきっかけ』になれば良いと思います。

イ 子どもの声

●たった一つの爆弾で13万人の死者がでたり逃れた人でも後になって放射線のせいで、ひどい扱いを受けたり病気に苦しんでいるということを知り、今ロシアが原始爆弾でウクライナをいかくしたりとしている状況で資料館を見てそんな簡単にいかくなどに使っていることは、よくないと思ったし、1つの爆弾によって苦しむ人がいるということを外国の人たちにもっと知ってもらいたいと思いました。このようなことを広島に行って感じて、今やっていることはおかしいと感じてほしいと思いました。このことを、活動報告でみんなに知ってもらいあらためて平和について考え直してほしいと思いました。

●今回親子ひろしま訪問団で平和とはなにか、実際に被爆者の方にも聞いたり、資料館へ行ったり、たくさんのことを学ぶことができました。

平和とはいったい何だろうか、普段は考えないことも考える機会になりました。戦争はいけない、戦争は怖いということは、話には聞いて理解していたつもりだったけれど、私たちにひとり一人にできることはなにか、被爆者の方に聞くことができました。秦野市の代表として参加したこの貴重な経験を活かして、市民の方々に伝えていくことができたらいいなと思っています。

●原爆の威力や悲惨さを知ることが出来たので、それを友達や家族、戦争のことを知らない人たちに知ってもらいたいです。

言葉でやめようと言うだけでは戦争はなくならないし、平和になるわけではないことを学びました。日頃から争いが起こらないよう、自分に出来ることを考えていきたいと思います。

●参加する前は、友達には参加することは伝えていませんでした。今度会った時には参加したことを話して戦争は怖いものだと言えたいと思いました。

灯籠流しとか、話をしてくれるボランティアの人たちも多くて、今の人も戦争で亡くなった人の思いを大切にしていると思ったので、そういうことも話したいと思いました。

テレビとかで見るものと実際に見るものでは、大きさや色が思っているのと違ったりするのが分かったのがよかったです（原爆ドームや式典会場など）。

●今回のイベントに出て、今まで戦争に関してわかっていたつもりでいたのだなと思いました。例えば、被爆後どのようなやけどを負ったのか、日本人以外にも被爆された方がいらっしやった事や被爆地は、中心ではなく今もやっている病院から上空600mのところで爆発したことなどです。なので私は、間違えて認識してしまっていることを本当はこうだったんだよということを知らせたいです。

また、被爆者の方が当時どのように感じどのように苦しんだのかも伝えたいとも思っています。

戦争は私たちの過ちであり、なくさなければならないこと度というのを、大人になっても忘れずに過ごし、伝えていきたいなと思います。

5 訪問団規約

(名称)

第1条 この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

(目的)

第2条 訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

(事業)

第3条 訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。
- (2) 平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。
- (3) 原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を受けながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。
- (4) その他目的を達成するために必要な事業。

(組織)

第4条 訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子5組10人により組織する。

- 2 訪問団に、団長、副団長、会計、監事及び記録を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。
- 3 団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。
- 4 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。
- 5 記録は、訪問団の事業を記録するものとする。
- 6 会計は、訪問団の経理を処理するものとする。
- 7 監事は、会計を監査するものとする。
- 8 訪問団の事務局は、秦野市役所平和主管課に置く。

(解散)

第5条 訪問団は、第2条の目的を達成したときに解散するものとする。

(経費)

第6条 訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附 則

この規約は、平成7年6月15日から施行する。

この規約は、平成28年4月1日から施行する。

この規約は、平成31年4月1日から施行する。

Ⅱ はだの平和の日のつどい

訪問を終え、秦野の地へ帰った親子ひろしま訪問団は、8月19日（土）に秦野市文化会館ホワイエにて「平和の日事業」として開催された「はだの平和の日のつどい」で、来場した100名を超える観客を前に訪問の活動報告を行いました。彼らが肌で感じ、学んできた、その生の声は、会場の市民の心にも深く刻まれました。

質疑応答では、市長から一番印象に残ったことは何か、と子どもたちに質問しました。

子どもたちは、平和記念資料館の見学で、やけどの写真や当時来ていた服などを見て心が痛んだこと、増岡さんの被爆体験聴講で被爆の怖さを感じた、これからどうしていくことが大切かということなどを学べたなどと答えました。

また実行委員長からは親御さんに親子で話し合ったこと、参加前と参加後のお子さんの変化について質問しました。親御さんは、まず親子で話し合ったこととして、増岡さんの“相手を思いやる気持ちをもつ”という言葉から、家族でどう気持ちよく過ごすかと考えるようになったことなどを話しました。お子さんの変化については、子どもが兄弟に原爆について話すようになった、夏休みの宿題の作文が増岡さんの原爆の話を広めるために書くようになったなどをお話いただきました。

なお、今年度の「はだの平和のつどい」では、公募市民6団体によるコンサートも行われました。

Ⅲ 被爆アオギリ二世の植樹

9月には訪問時に受け取った被爆アオギリ二世の苗木を団員が通学する学校に植樹をしました。その際、団員から活動報告や被爆アオギリ二世について、クラスの友達や全校児童生徒などに発表しました。この活動を通して、より多くの人に平和や命の大切さを伝えることができました。



IV 資料

1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限りない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

- 1 平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。
- 1 きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。
- 1 健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。
- 1 市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。
- 1 みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和44年10月1日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限りない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和61年3月27日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日 毎年8月15日

平成20年6月9日制定

2 広島市平和宣言^{せんげん}

78年前の原爆投下の日を、まるで生き地獄のようだったと振り返る当時8歳の被爆者は、「核兵器を保持する国の指導者たちは、広島、長崎の地を訪ね、自らの目で、耳で、被爆の実相を知る努力をしていただきたい。あの日、熱線で灼やかかれ、瞬時に失われた命、誰からも看取られず、やけどや放射能症で苦しみながら失われていった命。こうして失われた数え切れない多数の人々の命の重さを、この地で感じてもらいたい。」と訴えています。

本年5月のG7広島サミットで各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、こうした被爆者の願いが各国首脳の心に届いていることの証しになると思います。また、慰霊碑を参拝された各国首脳に私から直接お伝えした碑文に込められた思い、すなわち、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて、全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和を祈念する「ヒロシマの心」は、皆さんの心に深く刻まれているものと思います。こうした中、G7で初めて「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が独立の文書としてまとめられ、全ての者にとっての安全が損なわれない形での核兵器のない世界の実現が究極の目標であることが再確認されました。それとともに、各国は、核兵器が存在する限りにおいて、それを防衛目的に役立てるべきであるとの前提で安全保障政策をとっているとの考えが示されました。

しかし、核による威嚇を行う為政者がいるという現実を踏まえるならば、世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということ直視し、私たちが厳しい現実から理想へと導くための具体的な取組を早急に始める必要があるのではないのでしょうか。市民社会においては、一人一人が、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」というメッセージに込められた人類愛や寛容の精神を共有するとともに、個人の尊厳や安全が損なわれない平和な世界の実現に向け、為政者に核抑止論から脱却を促すことがますます重要になっています。

かつて祖国インドの独立を達成するための活動において非暴力を貫いたガンジーは、「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」との言葉を残しています。また、国連総会では、平和に焦点を当てた国連文書として「平和の文化に関する行動計画」が採択されています。今、起こっている戦争を一刻も早く終結させるためには、世界中の為政者が、こうした言葉や行動計画を踏まえて行動するとともに、私たちもそれに呼応して立ち上がる必要があります。

そのため、例えば、私たちが日常生活の中で言葉や国籍、信条や性別を超えて感動を分かち合える音楽や美術、スポーツなどに接し、あるいは参加して「夢や希望がある」といった気持ちになれるような社会環境を整えることが重要となります。皆さん、そうした社会環境を整えるために、世界中に「平和文化」を根付かせる取組を広めていきましょう。そうすれば、市民の支持を必要とする為政者は、必ずや市民と共に平和な世界に向けて行動するようになるかと確信しています。

広島市は、世界166か国・地域の8,200を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民レベルでの交流を通して「平和文化」を世界中に広めます。そして、平和を願う私たちの総意が為政者の心に届き、武力によらず平和を維持する国際社会が実現する環境を作ることを目指しています。また、被爆者の平和への思いを世界中の若者に知ってもらい、国境を越えて広め、次世代に引き継げるようにするために、被爆の実相に関する本市の取組をさらに拡充していきます。

各国の為政者には、G7広島サミットに訪れた各国首脳に続き、広島を訪れ、平和への思いを発信していただきたい。その上で、市民社会が求める理想の実現に向け、核による威嚇を直ちに停止し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けて一歩を踏み出すことを強く求めます。

日本政府には、被爆者を始めとする平和を願う国民の思いをしっかりと受け止め、核保有国と非核保有国との間で現に生じている分断を解消する橋渡し役を果たしていただきたい。そして、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となり、核兵器廃絶に向けた議論の共通基盤の形成に尽力するために、まずは本年11月に開催される第2回締約国会議にオブザーバー参加していただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆78周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和5年（2023年）8月6日

広島市長 まつい 松井 かずみ 一實

3 (広島) こども代表「平和への^{ちか}誓い」

みなさんにとって「平和」とは何ですか。

争いや戦争がないこと。

差別をせず、違いを認め合うこと。

悪口を言ったり、けんかをしたりせず、みんなが笑顔になれること。

身近なところにも、たくさんの平和があります。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

耳をさくような爆音、肌が焼けるほどの熱。

皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川面に浮かぶ死体。

子どもの名前を呼び、「目を開けて。目を開けて。」と、叫び続ける母親。

たった一発の爆弾により、一瞬にして広島のみちは破壊され、悲しみで埋め尽くされました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」

仲間を失った私の曾祖父は、そう言って自分を責めました。

原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、

生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

あれから78年が経ちました。

今の広島は緑豊かで笑顔あふれるまちとなりました。

「生き残ってくれてありがとう。」

命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。

私たちにもできることがあります。

自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。

友だちのよいところを見つけること。

みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。

今、平和への思いを一つにするときです。

被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。

身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。

誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。

令和5年（2023年）8月6日

こども代表 広島市立牛田小学校

広島市立五日市東小学校

6年 勝岡 英玲奈

6年 米廣 朋留



令和5年度
親子ひろしま訪問団
訪問の記録

編集発行 秦野市文化スポーツ部文化振興課
〒257-8501 秦野市桜町1-3-2
TEL 0463-86-6309